

高山南坊は一番に引取所に、後陣の戦を聞き只一騎にて乗來り、江口が深入して蓮臺寺村に備たるを見て、手を打て天の與る所也とて、使を長・太田・山崎方へ遣し、早々返し來候へ、直に小松城を乗取んと申遣候故、三人も備を亂し乘戻候。江口は是を知らず、猶蓮臺寺村に陣取候。坂井與右衛門は南淺井へ來り長重を諫て、今日の御勝は御仕合と申者也。大敵前にあり深入仕候はゞ、三道山の敵其虚に乘て懸橋口へ直に乘込候はゞ、此表へ出候人數敵の跡に成て、何の用に立可申哉、早々可引取所也と異見申候故、長重も引取被申候。早々江口をも呼戻し、小松城へ引取候。坂井與右衛門は五百餘にて荻谷に備て罷在、長重歸城の左右を聞て引候。高山・太田・長・山崎四備淺井啜へ乘戻し候得共、長重方は勝を持って城へ入り、近邊には一人もみえ不申候故、空敷・三道山へ引取申候。利長も淺井口の戦を聞き、只一騎にて三道山より乘來、長重が出るを見て、幸の事也、懸橋より小松城へ乘入り長重留守を取んとて、三道山の人數を呼に被越候。旗本一萬餘金の<sup>或云金和</sup>指物にて、光り渡り駈付候得共、長重早々城へ入り、坂井與右衛門掛橋

口を固め候故空く被引候。淺井啜は小松城より數十町南也。掛橋口は小松城の長にて、城の物構にて而も三道山と甚近し、若し長重淺井口に有之、城へ未入内に三道山より利長駈付、掛橋口より小松の留守を乗取らば、利長の大利可有之を、坂井が才智にて長重勝を全する事は、千兵は易得一將は難求とかや。水越縫殿は松平久兵衛と功を論じ候。利長曰。水越は先立て進むといへども、久兵衛を待て一度にかゝる。久兵衛は遅しといへども馬より下り少も不止、山代橋の上へ進候處、其手柄一番鎗也と定られ、本知三百石の上に壹千石を宛行ける。其後久兵衛を改て伯耆と稱す。殘四人にも感状をくれ被申候。上坂主馬も走つゞき鎗場迄參候間、感状を可出かとあり。鷹巢刑部は上坂よりも早し、上坂感状取らば我も取候はんと爭故に、上坂・鷹巢は鎗の數に不入。水越縫殿は初より橋際に踏止り、其上にて鎗を合せ、上の功也といへども、太田但馬と中惡敷加増に不預。小松方は鎗初り候場を推立られ、橋の北にて間切いたし候間、突立られ候と有之て感状は不出、加増くれ被申候。此物語を成田助九郎に直に聞て書記候。其後松平

久兵衛に此筆記をみせ候へば、少も相違無之と申候。

一、前田慶次の逸事

前田慶次は賀州利家卿のいとこ也。天性徒ものにて、一代の咄も色々あり。初は利家へ奉仕、武功度々に及ぶ。學問・歌道・亂舞に長じ源氏物語の講釋、伊勢物語の秘傳迄受て文武の士と云。利家、慶次が世を軽く存候を、ひたと叱り給ふを慶次不足に存じ、此家に久しく不可居と思て、大息ついで獨言しけるは、萬戶侯の封といふとも、心に不叶は浪人に同じ。只々心に適ふを以て萬戶侯と云べし。去るも留るも其所を得を樂しと思ふ也。所詮立退べしと思ひしが又持病の徒心起り、只立退んは無念也とおもひ、利家へ御茶を上んと望む。利家聞給ひ、慶次が心直て我等に茶をくれんと申候と悦給ひ、慶次宅へ入給ふ。慶次水風呂に冷水をだぶ／＼と汲入、茶済て後慶次申候は、今日は殊の外寒く候。私風爐を用不申候に付、湯風呂を申付候間、御入可被成哉と横山山城守<sup>是は傳聞の相違なるべし。</sup>を以伺しかば、利家則浴室に入給ふ。慶次湯加減を試て成程能候と申上て、利家裸に成てだぶと入り給ふに冷水也。利家屹と驚き、其徒もの

がすなと呼給ふ。慶次は松風と云ふ早馬を持ければ、兼て裏門に立置たりしが、其儘打乘て行方しらず成にけり。利家大に忿て方々を被尋候へ共、關東へ逃下り景勝へ五千石にて出たり。利家を憚り出家して、穀藏院ひよつと齋と名をかへ、今は長袖也とて二幅袖にして着之。景勝へ目見する其砌、會津へ入部の頃にて、諸浪人新參者多し。山上道及是は關東浪人、首供養三度したるもの也。其外蒲生家の浪人多し。志賀與三右衛門・栗生美濃守等云は、殿様の御歸依僧なれども、林泉寺が顔ほどにくいていて、一拳はり度き顔は世になしと云。慶次さらば我等往て林泉寺が顔をはらんと云て巡禮にばけ、林泉寺へ行き庭の築山所望して見物し、五言絶句の詩を即時に作り方丈へ進上す。和尚出會て、巡禮には奇特也、扱々作者哉とて唱和など給はり中々馳走あり。客殿に碁盤あり。慶次見て碁咄をする。和尚問。巡禮は碁が成るか、一番打たんとあり。慶次御相手仕候は、但負候はゞ鼻梁へしつぺいを當る筈に極て碁を初る。慶次態と負たり。さらば御約束の通り、私へしつぺいを御當候へといふ。和尚約束の事なれども、僧の身にて人を痛